

新・第1話「透明な水の大学にて」

“私”と猫たちの夢の装置が、今日もどこかで作動する。

夢の中で、私は大学の構内に立っていた。

足元には、水。くるぶしまで、透明な水が広がっていた。

構内というより、庭のようだった。煉瓦の小道や芝生のあいだを、静かな水が張っている。

不思議と冷たくない。どころか、優しい気配さえ感じる。

「これは…夢だな」と、どこかで気づいていた。

そして、気づく。

“何か”を探しているのだと。

水の中には、小さな部品のようなものが、ちらほらと沈んでいた。金属片のようでもあり、記憶のかけらのようでもある。私はしゃがみこみ、そっと水面に手を伸ばす。

——ない。見えているのに、うまく拾えない。

「探しているものは、これじゃないの？」

そんな声が聞こえた気がして、振り向くと、そこにはアビイがいた。夢の中でも、彼はやせ型で金髪の毛並みをなびかせていた。首には、なぜか聴診器をぶら下げている。

「投薬、忘れてないよね？」

アビイは、真顔で言った。

私は、吹き出しそうになった。夢の中でまでアトピカの心配をされるなんて。

「その部品、ユング心理学の基礎知識じゃない？」

今度は、ぽーちゃんが登場。白と灰色のハチワレで、どっしりと水の上に座っていた。いや、座って浮いていた。大日如来そのままに、泰然として。

「見つかるよ。見つかるけど、“なくても平気だった”って気づくかもね」

それは、私の心の声でもあった。

私はきっと、自分の“未完成さ”に怯えていたのだ。

臨床動作法の柱はある。だけどユング心理学という部品は、まだ完全に手にしていない。それでも、私は夢の中でこう思った。

——ああ、なくても平気。でも、やっぱり、探したい。

すると、ビオラが現れた。

茶色のマーブル柄のマンチカンで、小柄だけど敏捷な彼女は、水の中に顔を突っ込み、一気に小さな金色の部品をくわえて戻ってきた。

「これ、でしょ？」

私はそれを受け取り、掌にのせた。

軽くて、あたたかくて、どこか懐かしい感触がした。

そのとき、目が覚めた。

窓の外は、朝。

三匹はそれぞれ、私のまわりで寝息をたてていた。

部品はもうないけれど、手のひらには、まだ“何か”が残っていた。